

26. 芸術工学部

I	芸術工学部の教育目的と特徴	26-2
II	分析項目ごとの水準の判断	26-4
	分析項目 I 教育の実施体制	26-4
	分析項目 II 教育内容	26-8
	分析項目 III 教育方法	26-15
	分析項目 IV 学業の成果	26-19
	分析項目 V 進路・就職の状況	26-24
III	質の向上度の判断	26-27

I 芸術工学部の教育目的と特徴

- 1 芸術工学部の教育研究上の目的は、技術を人間生活に適切に利用するために、技術の基礎である科学と人間精神のもっとも自由な発現である芸術とを総合し、技術の進路を計画し、その機能の設計について研究するとともに、人文、社会、自然にまたがる知識と芸術的感性を基盤とする設計家を養成することである。
- 2 芸術工学部では、この目的を達成するため、「芸術工学の基本・基礎を十分に習得させ、人文、社会、自然にまたがる知識と芸術的感性を基盤とした幅広く深い教養と総合的な判断力を備えた創造性豊かな人材を養成する」という中期目標を設定しており、九州大学学則（平成 16 年度九大規則第 1 号）第 3 条第 2 項の規程に則り、芸術工学部における教育研究上の目的を規則に定めている。
- 3 芸術工学部は、環境設計学科、工業設計学科、画像設計学科、音響設計学科、芸術情報設計学科の 5 学科からなる。
- 4 芸術工学部の教育目的である幅広く深い教養と総合的な判断を備えた創造性豊かな人材育成を実現するため、
 - (1)基礎学力 : 高等学校の基礎科目をかたよりなく十分に学んでいること。
 - (2)好奇心 : あらゆることに広い関心と好奇心を持っていること。
 - (3)感性 : 美しさ、心地よさ、文化的な深みなどを感じ取れる感性を持ち、様々なことを予備知識だけでなく自分の視点から判断しようという意欲があること。
 - (4)表現力 : 自分が伝えたいことを整理し、言葉、図形、造形、音などによって表現することにより、他者に分かりやすく説明できること。
 - (5)柔軟性 : 具体的な経験から学び、判断する能力を持ち、また、相反する多様な条件の中でも、考え異なる人々と議論しながら、最良の解決策を模索できること。というアドミッション・ポリシーのもと、一般選抜、私費外国人留学生特別選抜、帰国子女特別選抜及び編入学試験により入学者を受け入れている。そして、芸術工学の特性を踏まえた全学教育と専攻教育との有機的連携による学部教育を行うという基本方針のもとに教育活動を行っている。
- 5 芸術工学部では、4 年以上の在学と 136 単位以上の単位取得という基本方針のもとで、学位を授与している。卒業生は半数程度が企業等へ就職し、残りの半数程度が大学院進学という進路をとっている。
- 6 芸術工学部の教育課程は、全学教育と専攻教育との有機的連携をとりながら、専攻教育においては人文・社会科学、理工学、芸術・デザインの各分野の授業科目を設け、芸術工学の基本・基礎を習得させる授業に加えて、芸術的感性や計画・設計能力、総合的な判断力を養うため、実践的な実習・演習・学外演習を多く取り入れている。
- 7 芸術工学部では、現在、インターンシップを単位化して、実社会での体験を通して学習内容の定着やキャリアデザインの推進を行っている

- 8 芸術工学部では、外国の大学との交流協定による単位互換、学生の多様なニーズ、社会からの要請等（学術の発展動向を含む）に対応して、教育課程に実践的な語学教育を配置し、加えて国際化を期待される芸術工学の社会的な側面からのニーズに対し、海外調査研究等の増大、学生の視野の国際化など関係者の期待に応えための取組を行っている。

[想定する関係者とその期待]

① 高校生・受験生

高校生・受験生から設計・デザイン系の学部に進学したいという希望に対し、年1回のオープンキャンパスに加えて、高校生対象の公開講座やサイエンス・パートナーシップ・プロジェクトを実施し、本学部の教育内容を伝える活動を行っている。

② 地域社会

地域社会の本学部で学びたいという期待に対し、科目等履修生・聴講生の受入れに加えて、市民対象の公開講座を年間6講座以上実施して、生涯学習の機会を提供している。

③ 在学生、雇用者、産業界

専門知識や技術を習得して高次の設計家として社会に活躍するという在学生の期待、より優れた企画・立案能力や計画・設計能力を求める雇用者や産業界の期待に対して、教育課程及び授業方法の改善を行っている。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

芸術工学部は、環境設計学科、工業設計学科、画像設計学科、音響設計学科及び芸術情報設計学科の5学科から編成されている。各学科の教育目的は資料1-1-Aに示すとおりである。なお、各学科の教育目的は、本学部の規則に定めており、学生便覧及びホームページ (<http://www.design.kyushu-u.ac.jp>) で公表している。

資料1-1-A 学科の構成と教育目的

学科名	学科の教育目的
環境設計学科	環境設計とは人間と環境の共生という理念にたつて、両者の関係のありかたを考察して、具体的な提案をすることである。エコロジー、持続可能性、資源、文化遺産、グローバル化、地域再生、景観といった近年の懸案に応えるため、芸術工学の基本理念にたつて技術、人間、社会、自然に関する多角的な知識を集結して考察し、芸術的センスあふれる建築、都市、緑地、ランドスケープなどをデザインできる創造的な人材を、国内外の設計家資格に適合し国際的にも通用する枠組みの中で組織的に養成する。
工業設計学科	人間を取り巻くものと、関連する多様な事象について、生活環境や社会活動に適合できるように計画・設計する創造活動である工業設計の専門家を養成するため、人と物的環境と社会の係わりについての幅広い教養と視野を身につけ、進展する科学技術に関する専門知識に基づく科学的・工学的思考力と、感性豊かな創造力・デザイン力・実践力を備えた総合的な設計能力を有する人材を組織的に養成する。
画像設計学科	人間にとって価値の高い情報を、視覚的に明快かつ美的に構成し処理、伝達することを可能にするため、画像・映像などの視覚情報やその媒体などの情報環境における、多様な局面に対する設計や計画を行う画像設計の専門家を養成することを目標とする。そのために、人間の視覚を始めとする感覚特性や視覚情報の数理・物理的特質に関する科学的・工学的な知識と思考能力および視覚情報の主体的な処理能力をあわせ持つ、創造性の豊かな人材を組織的に養成する。
音響設計学科	音文化に対する理解を深め、正しい評価を行い、人間に適合した音環境を創出し、さらに、音響情報の高度化、高品質化を推進することができる音響設計の専門家を養成するため、人間、社会においての広い視野を有し、音に対する芸術的感性と音響科学技術に関する専門的知識を兼ね備え、総合的な設計能力を有する人材を組織的に養成する。
芸術情報設計学科	インターネットや携帯電話が日常生活に普及した高度情報通信社会において、より創造的な人間生活とグローバルな世界の動きを結びつけながら、人間とメディアの関係を調整し調和のとれたメディア環境を科学的に計画し設計できる設計家を養成することを目的とする。そのため芸術や文化に対する鋭い感受性と深い理解を養い、コミュニケーションの形成に関する科学的・理工学的な専門知識を身につけ、来たるべき社会に向け新たな価値を創出し、広い世界に向け貢献することのできる総合力と企画力を備えた人材を組織的に養成する。

芸術工学部の学科別の学生定員並びに現員は、資料1-1-Bに示すとおり、学生数は、ほぼ110%程度で推移しており、適正である。

資料1-1-B 学士課程の学科別の学生定員と現員 (毎年5月1日現在)

	平成16年			平成17年			平成18年			平成19年		
	定員	現員	充足率									
環境設計学科	151	170	112.6	150	169	112.7	149	169	113.4	148	165	111.5

工業設計 学科	191	213	111.5	190	220	115.8	189	219	115.9	188	219	116.5
画像設計 学科	151	174	115.2	150	169	112.7	149	166	111.4	148	167	112.8
音響設計 学科	151	175	115.9	150	175	116.7	149	174	116.8	148	166	112.2
芸術情報 設計学科	159	174	109.4	158	173	109.5	157	178	113.4	156	179	114.7
計	803	906	112.8	798	906	113.5	793	906	114.2	788	896	113.7

芸術工学部を担当する教員数及び非常勤講師数は、資料 1-1-C に示すとおりである。大学院を重点化した本学では、学校教育法第 66 条ただし書きに基づき、教育部（大学院学府）と研究部（大学院研究院）を設置し、後者の研究部を教員が所属する組織としている。芸術工学部各学科の教育研究上の責任部局は芸術工学研究院であり、その運営は芸術工学部教授会によっている。

大学設置基準等の改正に伴い、平成 19 年 4 月 1 日からは、教育研究上の責任体制を明確にするため、教授、准教授、講師、助教を配置している。

収容定員 803 名に対する専任教員が 96 名で、大学設置基準を大幅に上回り、教育課程の遂行に必要な教員を十分に確保している。

また、大学教員が伝えることのできない、デザイン・設計分野の現場における現状や課題、問題解決方法を学生に伝えるため、建築家・デザイナーなどの実務者を多く非常勤講師として採用している。

資料 1-1-C 担当教員配置状況（平成 19 年 5 月 1 日現在）

	教授	准教	講師	助教	小計	非常勤講師	計	学生数	教員 1 人当たり学 生数
学士課程	45	33	1	17	96	75	171	896	9.33

※専任教員の専門分野別：芸術・デザイン系 32 名、理工系 52 名、人文・社会科学系 12 名

観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

（観点に係る状況）

本学部における教育上の課題は、教授会及び学務委員会で扱われている。また、学務委員会のもとに、教育課程改善のため教育課程ワーキンググループを、また、授業方法等改善のため FD ワーキンググループを設けている。上記の教授会、学務委員会及びワーキンググループで平成 17 年度に学部の教育課程の大幅な見直しを行い、その成果として、平成 18 年度から新カリキュラムを導入した（資料 1-2-A）。

資料 1-2-A 教育内容、教育方法の改善に向けた取組とそれに基づく改善の状況

教育上の課題 を扱う体制	<p>教授会 ← 学務委員会 ← 教育課程ワーキンググループ FD ワーキンググループ</p> <p>教育課程ワーキンググループ 学務委員会のもとで、教育課程の見直し及び運用方法を検討し、委員会へ答申。</p> <p>FD ワーキンググループ 学務委員会のもとでの授業改善等の具体的な取組を実施。</p>
改善に向けた 実施体制と取 組	<p>① 平成 16 及び 17 年度に教育課程ワーキング及び学務委員会において学部カリキュラムの改正を行った。</p> <p>② FD ワーキング及び学務委員会において、シラバスの記載内容及び公開方法を定めた。</p>

改善の状況	<p>① 平成 17 年度に学部カリキュラムの大幅な見直しを実施して、平成 18 年度から施行した。</p> <p>改正の概要は次のとおり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学院教育の質の充実を目指すために学部教育における専門教育を凝縮し、知識・技術の修得を徹底強化 ・ 卒業要件単位数の増加 124 単位→136 単位 ・ 講義と演習の組み合わせによる理論と実践の連携強化 ・ 学部共通科目の精選を行い、芸術工学部 5 学科の学生に共通的に必要な知識や技術について教育するために芸術工学基礎演習、デザイン史入門、デザインストラテジー基礎、インターンシップ（学部）を開設 <p>② シラバスは各授業の学習目標を明記することを定め、ホームページにより平成 18 年度から学外公開している。</p>
-------	--

本学部における FD は、学務委員会の下に置かれた FD ワーキンググループが中心となって、資料 1-2-B に示すようにシラバス・授業方法の改善、教室環境の改善、FD 活動の啓発等をテーマに議論し、さらに、授業向上のために全専任教員を対象とした FD 研究会を開催して、各教員の授業手法や学生の反応など情報交換を行い、よりよい授業方法について討議する体制となっている。平成 16 年度以降に実施した FD によって、シラバスの学外公開、シラバスにて各授業の学習目標の公開、教室 AV 機器の改良、各教員による授業実施方法の改善を行った。

資料 1-2-B 芸術工学部における FD 実施状況

平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
FD 研究会 2 回	FD 研究会 1 回	FD 研究会 1 回	FD 研究会 1 回
FD 研究会のテーマ及び参加者数			
年度	参加者数	テーマ	
平成 16 年度第 1 回	54	大学法人化に伴い FD 活動の望むこと 「教育評価に関するシンポジウム」に参加して 領域融合教育のためのカリキュラムを考える テーマ「国立大学法人九州大学」の中で取り組む FD 活動～総合大学化・大学院大学化・法人化の中で必要な FD 活動とは～（ディスカッション）	
平成 16 年度第 2 回	27	授業環境を考える－視聴覚機材と教室環境のあり方	
平成 17 年度	54	学部専攻教育における GPA 制度の導入に向けて 学生による授業評価と教員による授業に対する自己点検の現状報告	
平成 18 年度	34	学術英語の現状について	
平成 19 年度	33	コアセミナーの現状について	
FDWG の取組内容			
<p>FD ワーキンググループでは芸術工学研究院の 5 つの部門から部門毎に 2 名、計 10 名の委員により構成し、本学部における FD として取り組む内容を策定して、その委員が各部門において取り組む内容を伝達し、実行の支援を行っている。</p> <p>取り組む課題は年度計画に対応して設定し、授業評価の実施支援、視聴覚機材の整備、TA の運用、シラバス記載項目、学生の教員への相談体制の検討など、教員個人の向上に限らず、制度及び環境面で学部全体の教育活動の向上に繋がる取り組みを行っている。</p>			

全学 FD は資料 1-2-C に示すテーマで実施され、本学部から毎回多数の教員が参加している。全学 FD の実施を通じて、新任教員の研修、全学的教育課題に関する啓発、

全学教育における課題の共有などが促進されている。

資料 1 - 2 - C 全学FDの実施状況

年度	本研究院の参加 教員数	回数	各回における研修テーマ
平成 16 年度	23 名	4 回	① 新任教員の研修 ②GPA 制度の導入に向けて ③ 18 年度問題とその対応、④大学院教育の新展開
平成 17 年度	17 名	3 回	① 新任教員の研修 ②大学評価を知る ③ TA のあり方
平成 18 年度	24 名	3 回	① 新任の研修 ②コアセミナーの目標と課題 ③ GPA 制度が目指すこと
平成 19 年度	22 名	2 回	① 新任教員の研修 ② 認証評価で見出された九州大学の教育課題と今後の対応

本学部は、クラス担任制度を設け、各学科の各学年（1クラス 40～50 名）にクラス担任として教員 1 名を配置して、学生個人の履修状況にあわせた修学指導や学生生活における種々の疑問や悩みに応じて、学生個人の修学環境の改善を行っている。また、オフィスアワー制度を設け、勉学、学生生活及び進路上の問題や個人的な悩みなどの相談をどの教員でも対応できるようにし、オフィスアワーの時間帯に限らず、Eメールや電話による相談にも対応している。クラス担任やオフィスアワーにより、学生と教員の密接な関係を構築し、学生個人への対応を通じてあわれてきた制度面や組織的に取り組むべき課題や問題点をくみとっている。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

本学部は、環境設計学科、工業設計学科、画像設計学科、音響設計学科、芸術情報設計学科の 5 学科で編成し、資料 1 - 1 - A に示す教育目的をもっている。学生の在籍状況は平成 16 年度から平成 19 年度にかけて充足率は、ほぼ 110% 程度であり適切な在籍状況である。専任教員の配置は教授 45、准教授 33、講師 1、助教 17 の 96 名であり、収容定員の 803 名に対する教員数は、大学設置基準を大きく上回り、教員一人当たりの学生数は 9.33 名で学生個人への細やかな指導が十分にできる配置状況である。また、本学部の各学科においては、芸術・デザイン、人文社会系、理工学系をそれぞれ専門とする教員が偏りなく教育を担当し、デザイン・設計分野における実務者を非常勤講師として採用するなど、幅広い教養と総合的な判断力を備えた創造性豊かな人材を教育するための教育組織を構成している。

また、教育内容、教育方法の改善に向けて部局においては学務委員会の下に置かれた FD ワーキンググループの活動のもとで、シラバス・授業方法等の改善、教室環境の改善、FD 活動の啓発等に向けた取組を行っている。その結果、シラバス学外公開、教室 AV 機器の改善、各教員の授業実施方法等の改善・向上に結び付いている。

さらに学生個人に対してはクラス担任制度及びオフィスアワー制度を設け、学生と教員の密接な関係のもと、学生個人の学習・生活相談を通して、制度や組織的に取り組むべき課題や問題点をくみとり、教育の改善を行う体制となっている。

以上のことから、教育の実施体制及び教育方法・教育内容の改善に取り組む体制の両観点については、期待される水準を上回ると判断できる。

分析項目Ⅱ 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点 教育課程の編成

(観点に係る状況)

本学部では、養成する人材像と学問分野・職業分野の特徴を踏まえて教育目的（前掲資料1-1-A）を設定し、資料2-1-Bのように教育課程並びに卒業要件を定め、授与する学位として学士（芸術工学）を定めている。

また、本学部の教育課程は、全学教育科目と専攻教育科目を楔形に配置し、低学年時より芸術工学への専門適正能力ならびに包括的な理解力と適応力の形成をめざした配慮を行い、全学教育と専攻教育の有機的連携を持つカリキュラムを通した4年の一貫教育を実施している。さらに、学問研究の急速な発展やその社会利用の多様な展開に対応して、学生の個性ある多面的な能力を柔軟に発揮させることを趣旨とする「総合選択履修方式」が全学的な制度として設定している。

本学部では、芸術工学の理念である「技術の人間化」を実現するために、幅広く深い教養と総合的な判断を備えた創造性豊かな人材育成を目的に、基礎理論や講義から実践的な実習・演習・学外演習へ至る魅力的な教育メニューの提供という方針で教育課程を編成している。これを踏まえ、各学科では資料2-1-Aで示すような教育課程編成の特徴のもと、最低修得単位数を資料2-1-Bのように定めている。

資料2-1-A 各学科の教育課程編成・専攻教育科目の特徴

	教育課程編成上の特徴	専攻教育科目の特徴
環境設計学科	授業科目区分を大きく「全学教育科目」と「専攻教育科目」及び「総合選択履修方式」に分けた編成となっている。	フィールドワーク（野外調査など）を中心とした学外実習や実際に建物や緑地を設計する設計演習といった教育課程の編成となっている。
工業設計学科	同上	近・現代デザインの歴史、社会、文化的背景を踏まえた生活空間や生活機器デザインにかかる調査・分析、アイデア展開から提案に至るデザインプロセスの手法と表現力を修得するための講義、演習が開設されている。
画像設計学科	同上	視覚情報がどのように知覚され、判断されるかを総合的に理解し、画像情報の生成や自然界・社会からの獲得、認識・理解、処理、表示、伝達の理論及び手法を修得し、人間のイメージを視覚的に具体化し伝達するための表現能力を高めるための講義、演習、実習及び実験科目が開設されている。
音響設計学科	同上	物理音響、音環境、音響情報処理、聴覚、言語、音楽、音デザインの七つの領域にわたる総合的な教育課程が編成されている。
芸術情報設計学科	同上	芸術・文化、コミュニケーション、情報通信、数理工学、コンピュータや情報デザイン関連の授業科目が開設されている。

資料 2-1-B 全学教育科目と専攻教育科目の最低修得単位配分

学科名	全学教育	専攻教育	総合選択履修	総単位数
環境設計学科 工業設計学科 画像設計学科 音響設計学科 芸術情報設計学科	50 単位	80 単位	6 単位	136 単位

本学部の学生に履修させる全学教育科目は、資料 2-1-C に示すように、「教養教育科目」、「理系基礎科目」、「情報処理科目」から構成されている。要諦の部分について必修科目を配置するとともに、幅広い視野を確保するために選択科目を多数配置している。特に、高校での限られた科目履修を補填するため、文系及び理系コア科目に最低修得単位数を設定し幅広い学修を促している。

また、専攻教育科目は、「必修」「選択必修」「選択」「学部内自由」から構成されている。これらは「必修」に対する「選択必修」「選択」「学部内自由」の重みを各部門の特性に応じた形で位置づけると同時に、原則的には学生の主体的な学習機会を広げることにより幅広い観点から芸術工学への包括的な専門教育を実現できるように配慮している。そして、社会的なニーズに応じた実践的かつ応用性の高い、かつ広範な現場性・臨床性の特徴をもつ授業科目を配置している。

なお、資料 2-1-C に示すカリキュラムは、平成 18 年度から施行しているものである。

このカリキュラム改正により、全学教育科目においては九州大学教育憲章に定める、「人間性の原則」・「社会性の原則」・「国際性の原則」を実現するための基礎を築くことを目的とする「共通コア科目」や、大学での学習への適応を促進するために「コアセミナー」などが加わった。

専攻教育科目においては次のような改善を行い、卒業要件単位数の増加、基礎の徹底、理論の実践、芸術工学の知識・技術の共有などを行っている。

- ・大学院教育の質の充実を目指すために学部教育における専門教育を凝縮し、知識・技術の修得を徹底強化
- ・卒業要件単位数の増加 124 単位→136 単位
- ・講義と演習の組み合わせによる理論と実践の連携強化
- ・学部共通科目の精選を行い、芸術工学部 5 学科の学生に共通的に必要な知識や技術について教育するために芸術工学基礎演習、デザイン史入門、デザインストラテジー基礎、インターンシップ（学部）を開設

資料 2-1-C 科目構成

科目区分	科目名	各科目の目標	必修・選択の別
全学教育科目	共通コア科目	市民的生活のために必要となる基盤の形成	2 科目（4 単位）必修
	コアセミナー	大学での学びへの適応の促進、学習意欲の向上	1 科目（2 単位）必修
	文系コア科目 理系コア科目 総合科目	各分野の知識や見解がいかなる問題意識から形成され、その形成にどのような方法やもの見方が働いているかという学問のコアの理解	○文系コア科目は 3 科目（6 単位）選択必修 ○理系コア科目は 2 科目（4 単位）選択必修
	少人数セミナー	大学における学習への適応を促進し学習意欲を向上させ、優れた人格形成に資する人間的交流の場を	

		つくる	
	高年次教養科目	さまざまな分野の専門研究者の教育能力を総合的にいかして質の高い教養教育を実施して、優れた人材を育成	○高年次（3・4年次）において、選択科目を配置
	言語文化	国際社会を積極的に生きるために必要な、また、外国語運用能力を涵養・向上させ、異文化理解と国際的感覚、国際的教養の育成	○第一外国語6科目（6単位）、第二外国語4科目（4単位）選択必修 ○高年次において言語文化自由選択科目を配置
	健康・スポーツ科学	健やかな人間性を有する人材の育成	○1科目（2単位）必修
	理系基礎科目	諸科学を通して理系の共通基盤となる自然科学の基礎的な知識や方法を修得	○理系基礎科目は、学科の必要性に応じて必修もしくは選択必修科目を配置。21単位を修得
	情報処理科目	様々な社会活動の基盤となる情報処理技術の基礎を身に付けさせる	○情報処理演習Ⅴ（1単位）必修
	総合選択履修方式	幅広い教養を養うため、他学部・学科で開講されているすべての授業科目も履修できる方式	最低修得単位数は6単位
専攻教育科目	必修	単位の修得を義務づけている科目	環境 42 単位、工業 24 単位、画像 23 単位、音響 45 単位、芸情 17 単位
	選択必修	特定科目群から選択し、修得することを義務付けている科目	環境 22 単位、工業 21 単位、画像 12 単位、音響 0 単位、芸情 18 単位
	選択	所属学科の科目区分の範囲内で学生の選択に委ねられている科目	環境 10 単位、工業 29 単位、画像 39 単位、音響 29 単位、芸情 39 単位
	学部内自由	学部内の自学科、他学科で開設されている授業科目	各学科 6 単位

観点 学生や社会からの要請への対応

（観点に係る状況）

本学部の教育課程について、新入生合宿研修や3年次合宿研修、授業等の教育活動における学生との接触など通じて学生のニーズを把握し、中期目標・計画、年度計画に示される各検討事項、デザイン産業界との共同企画等を通じての情報収集、国内外の研究者との情報交換などにより、現在の教育課程における課題や改善点を把握している。

本学部では大学院教育の重点化、国際化への対応と実践教育の充実という課題を把握し、資料1-2-Aに示す大学院教育の重点化に向けた平成18年度の教育課程の改正以外に、資料2-2-Aに示すように、芸術工学部独自に外国の大学との交流協定による単位互換、インターシップの単位化等の取り組みを行った。

国際化への対応について、九州芸術工科大学の時代より国際的な交流協定を推進しており、そうした基盤を継承しながら、ますます国際化を期待される芸術工学の社会的な側面からのニーズを踏まえ、外国の大学との交流協定が増大している。これにあわせて交流協

定により受入れる外国人学生が増加し（資料 2-2-B）、本学部学生への刺激となっている。教育課程においては、芸術工学の分野における英語表現を修得するためにその分野の教員による「学術英語」を開設し、英語論文の読解のみならず、英語によるプレゼンテーションなど実践的な教育を行っている。また、芸術情報設計学科では海外調査を組み入れた教育を行っている。

実践教育の充実について、情報化や国際化を進展させる社会を構成する職種の広がり個性化する学生の多彩な就職意欲という相互の実態を踏まえ、新たに導入するための方策及び規程の整備等について教育課程ワーキング、学務委員会及び教授会において取組を行った結果、大学での修得内容と実務との関連づけによる知識の深化を目的に学部 3、4 年次を対象に授業として「インターンシップ（学部）」を開設して、インターンシップの単位化を行った。

資料 2-2-A 学生のニーズ、社会からの要請等に応じた教育課程の編成

	教育課程上の取組	概要
芸術工学部	本学部独自に外国の大学との交流協定による単位互換	以下の大学と協定を締結し、毎年学生の派遣及び受入れを行っている。 <ul style="list-style-type: none"> ・カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校（アメリカ）1990年締結 ・ミラノ工科大学（イタリア）1997年締結 ・カールスルーエ造形大学（ドイツ）2003年締結 ・東西大学校（韓国）2003年締結 ・パリ・ラヴィレット建築大学（フランス）2004年締結 ・ダルムシュタット科学技術大学（ドイツ）2007年締結 ・国民大学校（建築大学）（韓国）2007年締結
	インターンシップの単位化	平成 18 年度のカリキュラム改訂において、大学での修得内容と実務との関連づけによる知識の深化を目的に学部 3・4 年次を対象にした「インターンシップ（学部）」を新たに設けた。

資料 2-2-B 外国の大学との交流協定による学生受入れ・派遣数（派遣・受入年度別）

年度	派遣人数	派遣先	受入人数	受入先
平成 16 年度	6	<ul style="list-style-type: none"> ・カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校（3名） ・ミラノ工科大学（3名） 	2	カールスルーエ造形大学（2名）
平成 17 年度	6	<ul style="list-style-type: none"> ・カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校（1名） ・ミラノ工科大学（3名） ・パリ・ラヴィレット建築大学（2名） 	9	<ul style="list-style-type: none"> ・ミラノ工科大学（4名） ・カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校（3名） ・慶熙大学校（1名・大学間交流） ・パリ・ラヴィレット建築大学（1名）
平成 18 年度	4	<ul style="list-style-type: none"> ・カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校（2名） ・パリ・ラヴィレット建築大学（1名） ・シェフィールド大学（1名・大学間交流） 	8	<ul style="list-style-type: none"> ・カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校（1名） ・パリ・ラヴィレット建築大学（1名） ・ミラノ工科大学（4名） ・カールスルーエ造形大学（1名） ・シンガポール大学（1名・大学間交流）
平成 19 年度	5	<ul style="list-style-type: none"> ・カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校（2名） ・ミラノ工科大学（1名） ・香港中文大学（1名・大学間交流） 	11	<ul style="list-style-type: none"> ・ミラノ工科大学（2名） ・カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校（2名） ・パリ・ラヴィレット建築大学（3名） ・ボルドー大学（2名）

				<ul style="list-style-type: none"> ・東北師範大学（1名・大学間交流） ・釜山大学校（1名・大学間交流）
--	--	--	--	---

本学部は毎年8月上旬にオープンキャンパスを開催し、各学科の教育内容や卒業後の進路などを紹介する学部説明会、各研究室での模擬実験、模擬講義、展示、在学生による進学相談などを行っている（資料2-2-C）。

資料2-2-Dで示すように参加するまで本学部についてはあまり知らなかったものが、参加することにより本学部への理解度が上がり、受験したいと思うようになっていく。オープンキャンパスを通じて、参加した高校生・受験生がもつ将来の目標の実現に本学部が適していると判断されていることがわかる。入学前の学生に本学部の教育内容について理解を深めることにより、入学後のミスマッチ防止につながる。

また、高校生対象の公開講座として、「音と画像の実験」「最先端メディアスタジオワークショップ」などを開催し、音響設計や画像工学、マルチメディアなどの分野を体験的に学び理解を深めてもらう取り組みを行っている。これには全国各地から参加者があり、本学部の教育・研究分野が全国から注目されているといえる。

平成18年度から科学技術振興機構の「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト」講座型学習活動を本学部芸術情報設計学科と近隣の高等学校が共同して実施し、CG制作やメディア環境構築に関する演習を通じて、高校で学習する物理・数学の知識がこの分野で活用されていることを高校生に認知させる取り組みを行っている。

資料2-2-C オープンキャンパス及び公開講座の実施状況

オープンキャンパス	実施日、参加者数	公開講座	講座の概要
平成16年度	① 実施日：8月6日 ② 参加者数：546名	平成16年度	① 高校生を対象とした公開講座 講座数：1講座 参加者数：36名 ② 社会人を対象とした公開講座 講座数：6講座 参加者数：104名
平成17年度	① 実施日：8月4日 ② 参加者数等：539名	平成17年度	① 高校生を対象とした公開講座 講座数：1講座 参加者数：23名 ② 社会人を対象とした公開講座 講座数：6講座 参加者数：111名
平成18年度	① 実施日：8月4日 ② 参加者数等：656名	平成18年度	① 高校生を対象とした公開講座 講座数：3講座 参加者数：46名 ② 社会人を対象とした公開講座 講座数：6講座 参加者数：143名
平成19年度	① 実施日：8月8日 ② 参加者数等：654名	平成19年度	① 高校生を対象とした公開講座 講座数：3講座 参加者数：85名 ② 社会人を対象とした公開講座 講座数：9講座 参加者数：307名

資料 2-2-D オープンキャンパスアンケート集計結果（平成 19 年度）

回答者数 113 名 (回収率 19%)		○芸術工学部を受験したいと思うか	
○学部説明会内容の理解度		①思う：92 名 (81%)	
・わかりやすさ	5 点満点で平均 4.3 点	②思わない：1 名 (1%)	
・満足度	5 点満点で平均 4.4 点	③よくわからない：17 名 (15%)	
○施設見学の満足度			
	5 点満点で平均 4.5 点		

地域社会に対しては、毎年 6 講座以上の公開講座を実施している。音楽、美術、デザイン、CG、建築、自然環境、芸術文化、著作権など、多彩な講座を市民に提供することにより、芸術工学の多様性や各分野の研究成果を市民に公開している（資料 2-2-C）。

さらに、本学部では、科目等履修生の入学を許可しており、受入状況は資料 2-2-E に示すとおりである。生涯教育支援拡充の観点から科目等履修生の履修方法について、平成 19 年度から、科目等履修生の学習ニーズに沿って学期開始後に履修科目を変更できることの改善を図った。

資料 2-2-E 科目等履修生の受入状況

	説 明	平成 16 年	平成 17 年	平成 18 年	平成 19 年
学部科目 等履修生	本学の学生以外の者で、学部の授業科目のうち一又は複数の授業科目を履修することを志願する者	4	7 (1)	9 (1)	4
大学院科 目等履修 生	本学の学生以外の者で、大学院の授業科目のうち一又は複数の授業科目を履修することを志願する者。学部の授業科目を履修することもできる。	2	2	8 (1)	4
全 体		6 (0)	9 (1)	17 (2)	8 (0)

* () 内は留学生数

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

本学部では、「全学教育科目」と「専攻教育科目」を楔形に配置し、さらには「総合選択履修方式」に分けた編成とし、それぞれが有機的連携を持つカリキュラムという 4 年の教育課程を編成し、芸術工学の理念である「技術の人間化」をめざし、幅広く深い教養と総合的な判断を備えた創造性豊かな人材育成が実現されるよう多彩な授業科目を配置している。

平成 17 年度に基礎の徹底、理論の実践、芸術工学の知識・技術の共有など目的としたカリキュラムの改善を行い、平成 18 年度入学者から適用している。

さらに、芸術工学部独自に外国の大学との交流協定による単位互換、インターシップの単位化等、学生の多様なニーズ、社会からの要請等（学術の発展動向を含む）に対応して、教育課程に実践的な語学教育や海外調査などの意欲的な取組みを重視した授業科目等を編成している。

特に、国際的な交流協定は優れており、国際化を期待される芸術工学の社会的な側面からのニーズに対し、継続的な留学生の受け入れと漸増、教育課程における実践的な語学教育や学生の視野の国際化などの点から関係者の期待に据えていると判断される。

高校生、その保護者、高等学校教員に対しては、年 1 回のオープンキャンパスを実施し、学科紹介、模擬授業、研究室公開などにより本学部の教育に関する情報を提供している。さらに高校生対象の公開講座やセミナー等を年 3 回以上行うことで本学部の教育内容を体験的に知っていただく取組みも盛んに行っている。産業界に対してはインターンシップ

の推進や実践型教育を導入し、実社会を見据えた教育を行っている。また、地域社会に対しては、科目等履修生・聴講生が学期開始後に履修科目を変更することができる制度を実施し、公開講座については、平成 19 年度は本学部の特徴を活かした 9 つの講座を開催している。地域社会と接しながら、芸術工学の裾野を広げることに資する活動を行っている。

以上により、教育課程、学生や社会からの要請への対応という両観点において期待される水準を上回ると判断できる。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

本学部では、幅広く深い教養と総合的な判断力を備えた創造性豊かな人材育成という教育目的や社会との関連性の高い芸術工学分野の特性に沿って、資料3-1-Aに示すような授業形態・実施方法の特色を重視しながら、専攻教育科目の授業科目を、資料3-1-Bに示すような組合せにより開講している。

資料3-1-A 授業形態上の特色

- 講義と演習の組み合わせによる理論に実践の伴う授業形態である「講義・演習」という授業形態を設けている。
- 社会との関連性を重視し、フィールドワークや学外授業を多く実施。
- コミュニケーション能力の向上のため、学生によるプレゼンテーションを組み込んだ演習授業

資料3-1-B 学部教育科目の授業形態別開講数 (平成19年度実績)

講義	講義・演習	演習	実験	実習	左記のうちユニークな授業の開講数	
					学外授業・フィールドワークを伴うもの	プレゼンテーションを伴うもの
130科目	21科目	72科目	8科目	8科目	21科目	43科目

担当授業科目に関しては、教授、准教授、講師は主要授業科目を含めた全ての科目を担当し、助教、非常勤講師は主要授業科目以外の科目をそれぞれに担当している。

本学部では、資料3-1-Cのように、授業概要や毎回の授業計画に加え、全体の教育目標及び各回の学習目標、成績評価基準を評価項目別の配点比率を明記したシラバスを作成し、学内外に公開している〔(本学部ホームページ(<http://www.design.kyushu-u.ac.jp>))〕

資料3-1-C シラバスの共通記載項目

基準掲載項目	記載例等
授業科目名	○○○○
担当者	○○○○
キーワード	検索上の利便を考慮して記入(複数可)
全体の授業概要	授業の概要を記入
全体の教育目標	授業を通して学ばせる目標を記入 (例) ○○について、○○できるようになることを目標とする。
授業計画	・毎回の授業計画を記入 ・学生に習得してほしい事項を具体的に記入する。 (例) 第1回 ○○について(主題を記入) (学習目標) ××について理解し、説明できること。 第2回 □□について : 第N回 △△について
履修上の注意・学習上の助言	(例) 教科書を中心に授業を行う。課題を示し、レポートの提出を求める。
テキスト	使用教科書等を記入

参考文献	教科書以外に授業理解や発展的な学習の参考となる文献を記入										
学習相談 オフィスアワー	オフィスアワーなどの時間 (例) 毎週○曜日○時～○時に教員室(○号館○階○号室)で学習相談を行う。希望者は事前に電子メールで相談希望日時、相談内容を連絡の上、予約すること。(連絡先はオフィスアワーについての掲示や学生便覧等を参照)										
成績評価基準・総合評価割合	<table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th colspan="2">総合評価割合</th> </tr> <tr> <td>(記入例)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>定期試験</td> <td>50%</td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>50%</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>100%</td> </tr> </table> <p>成績評価の基準を明示する。 ※出席点を評価基準に加える場合は、「平常点」と表記する。</p>	総合評価割合		(記入例)		定期試験	50%	レポート	50%	合計	100%
総合評価割合											
(記入例)											
定期試験	50%										
レポート	50%										
合計	100%										
評定の要点	評価方法を具体的に記入する。 (記入例) 毎授業時間に、二言レポートを課す。 成績評価は、授業内容を出題範囲とした定期試験及び二言レポートの提出回数によって行う。										
その他	学生へ周知したい事項を記入する。										
参考ホームページ	教員ホームページのアドレスなどを記入。										

本学部において、何を目標として、何を学び、どのように評価するかを詳細にシラバスで示し、ホームページに公開している。教育課程においては、講義と演習の組み合わせによる理論に実践の伴う授業形態である「講義・演習」を配置している。授業手法においては、理論と社会における実践の連携のためフィールドワークや学外演習を多く取り入れ、コミュニケーション能力向上を目的としたプレゼンテーションの機会を積極的に導入している。(資料3-1-D)

学生個人の修学指導・支援においては、オフィスアワーに限らず、Eメールや電話を活用して、日常的に学習相談に応じている教員が多い。また、資料3-1-Eに示すように多数の大学院生をTAに採用して、芸術・デザインに関する科目における細やかな技術指導やプレゼンテーションをより発展的な内容にするためのサポートを行っている。

資料3-1-D 講義と演習を組み合わせた授業科目

環境設計学科	ポートフォリオ管理(1単位)、留学生のためのデザイン入門(2単位)、主観評価法(2単位)、デザインストラテジー基礎(2単位)、空間デザイン論(2単位)・空間プロジェクト(4単位)、建築デザイン論(2単位)・建築プロジェクト(4単位)、ランドスケープデザイン論(2単位)・ランドスケーププロジェクト(4単位)、都市デザイン論(2単位)・都市プロジェクト(4単位)
工業設計学科	現代生活デザイン論・演習(3単位)、生活機器設計論・演習(3単位)、生活空間設計論・演習(3単位)、デザイン文化論・演習(3単位)、生活器機造形論・演習(3単位)、生活空間造形論・演習(3単位)、デザインシステム論・演習(3単位)、主観評価法(2単位)、電子工学(2単位)、情報理論(2単位)、デザインストラテジー基礎(2単位)、留学生のためのデザイン入門(2単位)
画像設計学科	主観評価法(2単位)、留学生のためのデザイン入門(2単位)、電子工学(2単位)、情報理論(2単位)、デザインストラテジー基礎(2単位)
音響設計学科	音響構成(4単位)、音響信号処理演習(2単位)、電気工学(2単位)、音響理論演習Ⅰ(3単位)、音響理論演習Ⅱ(3単位)、音楽理論表現演習(2単位)、音楽構造基礎演習(2単位)、主観評価法(2単位)、デザインストラテジー基礎(2単位)、情報理論(2単位)、システム工学(2単位)、留学生のためのデザイン入門(2単位)

芸術情報設計 学科	比較映画・演劇文化演習（2単位）、芸術文化企画演習（2単位）、デジタルコンテンツデザイン（2単位）、メディア情報処理・演習（2単位）、芸術情報プログラミング言語・演習（2単位）、主観評価法（2単位）、デザインストラテジー基礎（2単位）、留学生のためのデザイン入門（2単位）
--------------	--

資料3-1-E TAの採用状況

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
TA採用数	180	193	200	153

観点 主体的な学習を促す取組

（観点に係る状況）

本学部では、学生の自主的な学習を促し、授業時間外の学習時間を確保するため、各授業において様々な制作課題・プレゼンテーションやレポートを課している。また、シラバスにおいても、参考書や学習相談方法を記載するとともに、オフィスアワーや電子メール等による授業内容等に関する質問・相談についての対応方法を開示している（前掲資料3-1-C）。

履修指導は、クラス担任制度を設け、各学科の学年毎に1名の教員が担当している。また、学生全体に対しては、資料3-2-Bに示すように履修ガイダンスを実施している。

資料3-2-A オフィスアワーの利用状況

	平成16年度	平成17年度	平成18年度
修学に係る質問・相談件数	432件	578件	413件

資料3-2-B 履修ガイダンスの実施状況

	実施組織	実施時期	実施対象者	実施内容
芸術工学部	各学科	4月	1年	新入生ガイダンス ○教育理念・授業の履修・学習に関する問題への相談・助言など学生生活についてのガイダンス
		4月	各学年	在学生ガイダンス ○履修解説 ○3年次専攻教育着手条件・口頭試験の説明（2年次） ○卒業研究着手条件・卒業研究指導教員配属に関する説明（3年次） ○卒業研究に関する説明（4年次）
		4月	3年次編入生	編入生ガイダンス ○編入生入学式、履修解説

全学教育においては、時間割に指定された科目以外は原則履修できないシステムを採用し、実質上の履修単位のキャップ制を実施している。さらに、全学教育及び専攻教育において平成19年度よりGPA制度を導入し、選択科目の履修登録を慎重にさせることにより履修科目を自主的に学習させる体制を整えた。組織的には、在学生ガイダンスやクラス担任等による学修相談や助言を通じて、各学生に成績取得状況や卒業研究の着手条件などの次段階へ進むための状況を把握させ、学生の自主的な学習を促している。また、学生がそれまでに学習してきた知識について、授業科目の枠を超えた創造的活用力の修得状況を確認・評価するために3年後期（2月）に「口頭試験」を実施している。学生の自主的な学

習を支援するため、資料 3-2-C に示すように、自習室や情報機器室を用意している。

資料 3-2-C 自習室・情報機器室の整備状況

	自習室	情報機器室
芸術工学部	<ul style="list-style-type: none"> ○講義室及び共同製図室（授業時間外の開放） ○控室（2号館、3号館、7号館） ○環境設計学科製図室、デザイン演習室等 	<ul style="list-style-type: none"> ○芸術情報設計学科コンピュータ室 ○情報基盤研究開発センター大橋分室 第一実習室 【51台】 第二実習室 【51台】 第三実習室 【18台】 オープン端末室 【28台】

（2）分析項目の水準及びその判断理由

（水準） 期待される水準を上回る。

（判断理由）

本学部の教育目的を達成するために、資料 3-2-B のように講義 130、講義・演習 21、演習 72、実験 8、実習 8 のように多彩な授業形態がバランス良く組み合わせられている。「講義・演習」とは、講義と演習の組み合わせによる理論に実践の伴う授業形態である。また、年度初めに学年ごとに行う新入生ガイダンスや在校生ガイダンス、編入生ガイダンス等を通しての履修ガイダンス、クラス担任等による学修相談や助言、などの適切な学習指導法の工夫がなされている。わかりやすくかつ詳細な授業概要・授業計画、授業の達成目標と成績評価基準を示したシラバスの公開、フィールドワークや学外演習の実施、コミュニケーション能力向上を目的としたプレゼンテーション機会の積極的導入、学習相談やオフィスアワー、等の様々な取組みが効果的に機能している。

学生の主体的な学習を促すため、授業では制作課題・プレゼンテーション・レポートを課し、シラバスにおいても、参考書や学習相談方法を記載するとともに、オフィスアワーや電子メール等による授業内容に関する質問・相談についての対応方法を開示し、同時に自習室・情報機器室の整備を進め、学生の教育環境の充実化の取組みが行なわれている。また、授業科目の枠を超えた創造的活用を促すため、「口頭試験」を実施している。さらに国際交流協定を結んだ外国の大学への留学時の単位認定やインターンシップの単位化等の学外での学習に配慮をしている。

以上の取組みや活動は、授業形態の組合せと学習指導法の工夫、主体的な学習を促す取組において有効であり、幅広く深い教養と総合的な判断力を備えた創造性豊かな人材を育成する教育拠点という関係者の期待を上回ると判断される。

分析項目Ⅳ 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

本学部学生が身に付けるべき学力や資質・能力は、工学や技術に関する科学的な知識、人間や社会に対する深い洞察、そして設計やデザインを行う上で創造的な芸術的センスを兼ね備えることである。このような学力や資質・能力を量り、伸ばしていくため、本学部の授業においては1回の定期試験・レポートによる評価だけではなく、複数の課題制作・プレゼンテーションによる評価、授業中の小レポート・小テストによる複数回の評価を行い、授業内容の理解度や進捗状況を把握しながら授業が運営されている。このため本学部の単位取得状況は、資料4-1-Aに示すとおり、特に1、2年次において高い単位取得率を示している。また、学修を促すため、3年次専攻教育科目の履修条件と卒業研究の着手条件を定め、前者は2年終了時の単位修得状況、後者は3年次終了時（画像設計学科は3年前期終了時）の単位修得状況により、各条件の可否を判定する制度を設けている。

さらに、本学部独自の取り組みとして、3年後期に「口頭試験」を実施している。学生がこれまでに学習してきた知識について、特定の用語やそれに関係する事項について多方面から口頭による質問を行い、用語の意味、現象の原理・仕組みなどが理解できているか、またそれらの理解を基に創造的な発想・手法により問題解決へと導いていく能力を有しているか試験を行っている。学生は入学時からこの試験を意識しながら授業に臨み、広範な知識を修得している。

留年率、休学率の過去4年の経年変化は、資料4-1-Bに示すとおり低い。これらのことから、各学年時において学生は学力を適切に身に付けていると判断される。

資料4-1-A 単位取得状況

		平成16年度			平成17年度			平成18年度			平成19年度		
		履修登録者数	単位取得者数	単位取得率									
学士課程	1年	5207	4798	92.1	5332	4846	90.9	6162	5351	86.8	3820	3372	88.3
	2年				1507	1231	81.7	1534	1174	76.5	1170	968	82.7
	3年							763	569	74.6	489	335	68.5
	4年										79	43	54.4
	全体	5207	4798	92.1	6839	6077	88.9	8459	7094	83.9	5558	4718	84.9

※ 履修登録者数・単位取得者数ともに延べ人数、単位取得率：単位取得者数を履修登録者数で割った比率

資料4-1-B 留年・休学状況（毎年5月1日現在）

学士課程		平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
	留年者数（留年率）		50(5.5)	46(5.1)	52(5.7)
休学者数（休学率）		13(1.4)	12(1.3)	8(0.9)	8(0.9)

※ 留年者数：正規修業年限を超えて在籍している学生数、留年率：留年者数を在籍学生数で割った比率

卒業者の修業年数別人数、学位授与状況は、それぞれ資料4-1-C、Dで示すとおり、

非常に高い数字を示しており、学生は学士（芸術工学）に適応した学力や能力を身に付けて修了している。

資料４－１－Ｃ 卒業者の修業年数別人数（人）

修業年数	芸術工学部			
	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
4 年	180	176	179	176
5 年	18	15	20	16
6 年以上	7	9	6	10
その他（編入学等）	8	9	10	7
計	213	209	215	209

資料４－１－Ｄ 学位授与状況（人）

	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
学士（芸術工学）	213	209	215	209

また、学生の受賞状況を、資料４－１－Ｅに示す。これらのことから、社会的な外部評価が非常に高いという点で教育研究指導が高い質で行われていることを示している。

資料４－１－Ｅ 学生の受賞状況

所属	受賞学生	賞の名称	授与組織名	受賞年月	受賞内容
環境設計学科	学生 A 他 3 名	入賞	みどりの 5 団体フォーラム	2007	学生設計競技「新しい 21 世紀の街」に応募し、入賞
画像設計学科	学生 B	入選		2007	アニメーション作品が第 19 回 DoGA CG アニメコンテスト等国内外の数々の映画祭に入選、上映
〃	学生 C	意匠登録		2007	意匠に係る物品として登録
環境設計学科	学生 D	佳作		2006	日・中・韓国国際学生造園デザインコンペにおいて作品が入賞
〃	学生 E 他 3 名	佳作	日本造園学会、 中国風景園学会、 韓国造景学会	2006	日・中・韓国国際学生デザインコンペにおいて入賞
〃	学生 F	入選	セントラル硝子	2005	第 40 回セントラル硝子国際建築設計競技で 798 点（うち海外より 407 点）の応募の中から入賞
〃	学生 G	九州支部入選	日本建築学会支部	2005	日本建築学会支部共通事業設計競技で入賞
〃	学生 H 他 2 名	優秀賞	みどりの 5 団体フォーラム	2005	コンペにおいて作品が入賞
〃	学生 I	銀賞	J I A 東海支部	2005	第 22 回建築設計競技で作品が入賞

九州大学芸術工学部 分析項目Ⅳ

〃	学生 J	佳作	日新工業（株）	2005	第 32 回建築競技において、応募 751 点の中から作品が入賞
〃	学生 K 他 1 名	佳作	2005 サステナブル建 築世界会議	2005	新建築住宅設計競技において、世界 38 カ国 465 点の中から作品が入賞
工業設計学科	学生 L 他 4 名	最秀作	コイズミ産業 （株）	2005	第 2 回学生家具デザイン展において、デザイン系の学部を持つ 8 大学を指定して作品募集のあったもので、作品が入賞
〃	学生 M 他 6 名	最秀作	コイズミ産業 （株）	2005	第 2 回学生家具デザイン展において、デザイン系の学部を持つ 8 大学を指定して作品募集のあったもので、作品が入賞
画像設計学科	学生 N	グランプリ	CG-ART 協会	2005	CG コンテスト静止画部門で 1700 点の中から作品が入賞
〃	学生 O	優秀賞	トヨタ自動車九州	2005	アイデアコンペで作品が入賞
		最優秀デザイン賞	エフアラネット	2005	コンペで作品が入賞
		NHK の番組で紹介	NHK	2005	大橋駅リニューアルデザイン産学官共同プロジェクトに参加
環境設計学科	学生 P	佳作	日本建築学会	2004	技術部門設計競技において作品が入賞
		最優秀賞	三菱電機	2004	コンペにおいて作品が入賞
〃	学生 Q 他 3 名	入選賞	みどりの 5 団体フォーラム	2004	学生設計競技において作品が入賞
工業設計学科	学生 R	ココロ賞（審査員特別賞）	ココロ	2004	コンペで 815 点の中から作品が入賞
〃	学生 S	佳作	三栄書房	2004	国際カーデザインコンペにおいて作品が入賞
〃	学生 T	3 位入賞	テレビ東京	2004	第 4 回ダンボール王選手権において作品が入賞
画像設計学科	学生 U	最優秀賞		2004	学生 CG コンテストの静止画部門において作品が入賞
		入賞	アジアデジタルアート学会	2004	アジアデジタルアート大賞動画部門で作品が入賞
〃	学生 V	優秀賞	アジアデジタルアート学会	2004	アジアデジタルアート大賞動画部門で作品が入賞
音響設計学科	学生 W	優秀賞		2004	デジタルコンテンツグランプリ東北 2003 において 170 点の中から作品が入賞

観点 学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況)

学業の成果に関する学生の評価は、FDワーキンググループで作成した授業評価アンケート調査により各授業担当教員が実施し、その調査結果などから、教育方法等の改善が図られており、教授方法の工夫により成果が得られた教育活動の例を資料4-2-Aに示す。また、平成19年度から授業評価アンケートを学生の授業への自己点検を促すための調査項目に整理して、資料4-2-Bの内容で実施されている。また、芸術工学部の教育がどの程度効果的であったか卒業生に対するアンケート調査を行った結果、資料4-2-Cで示すとおりいずれの項目においても90%以上が評価3、評価4及び評価5と高い評価となっており、本学部の教育の程度が高い水準にあると判断できる。

資料4-2-A 学生による授業評価の内容

目的	各授業の改善のため
実施対象	学部生が受講する全科目。
実施時期	年2回(前期:7月、後期:1月)
内容	①シラバスの理解度 ②出欠回数 ③予習・復習時間 ④授業中の話し方 ⑤不明な点への学生自身の対応 ⑥授業の理解度 ⑦学習指導の適切さ ⑧学生からみた授業の長所・改善点
成果が得られた教育活動の例	<ul style="list-style-type: none"> ○ 積極的な授業参加を誘発させる工夫(指名して質問する) ○ 授業の組み立ての工夫(復習から入るスタイルの導入等) ○ わかりやすさ向上の工夫(ポイントを絞り、明確に教授) ○ 良いレポート、悪いレポートの講評を授業中に実施(教員が学生のどの点を評価するかが分かって好評) ○ 中間試験の実施 ○ 授業で学ぶことへの動機付け(授業の十分なオリエンテーションの実施) ○ 授業で教授した内容、手法を体験させる。(学外実習を行った。授業で教授した手法を体験させ、レポートを提出させた。) ○ 「授業をよくするための質問シート」を用意した。 ○ 電子メールでの質問を受け付けた。 ○ 配付資料に書き込むことによりノートができるような工夫を行った。 ○ 課題を多く出題、次回解説 ○ 機材の効果的な活用(いろいろな機材や用具を持ち込み、デモンストレーションを多く実施した。)

資料4-2-B 卒業生に対するアンケート調査結果

(1) 工学や技術に関する科学的な知識を身に付けること。

全く効果的でない	1	2	3	4	5	十分効果的である
回答数(67名)	2	8	19	27	11	
%	3%	12%	28%	40%	17%	

(2) 創造的な芸術感性についての専門性を身につけること。

全く効果的でない	1	2	3	4	5	十分効果的である
回答数(67名)	1	8	19	26	13	
%	1%	12%	28%	39%	20%	

(3) 「もの・こと」の企画・計画・設計できる能力を身につけること。

全く効果的でない	1	—	2	—	3	—	4	—	5	十分効果的である
回答数(67名)	3		10		19		21		14	
%	4%		15%		28%		31%		21%	

(4) 人と社会を結ぶ情報伝達の専門性を身につけること。

全く効果的でない	1	—	2	—	3	—	4	—	5	十分効果的である
回答数(67名)	5		14		19		23		6	
%	7%		21%		28%		35%		9%	

(5) 芸術工学部の理念である「技術の人間化」に則した総合的なデザイン能力を身につけること。

全く効果的でない	1	—	2	—	3	—	4	—	5	十分効果的である
回答数(67名)	5		9		20		20		13	
%	7%		13%		30%		30%		19%	

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

在学中の高い水準の単位取得状況や卒業時の高い学位授与率の状況、また多数の受賞状況等から、教育の成果や効果はあがっている。特に学生の受賞状況をみても分かるように国内外の様々な機関から評価されており、芸術工学の特性である総合性を、学部学生の学習過程を考慮して、具体性を通して身につけさせるという本学部の教育成果が社会的に評価されていると判断される。また、本学部の教育を受けて卒業した卒業生へのアンケート調査では、評価3、評価4及び評価5の評価が90%以上を占めている。このことから本学部の教育の成果や効果があがっていると判断される。

以上のことから、学生が身に付けた学力や資質・能力、学業の成果に関する学生の評価の両観点において、期待される水準を上回ると判断できる。

分析項目V 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 卒業(修了)後の進路の状況

(観点に係る状況)

過去4年間における本学部における卒業／修了後の進路状況は、資料5-1-Aに示すとおりである。

過去4年間の卒業生数は約210名で変化がない中、「その他」が44名から20名前後にまで半減し、「就職」が増加している。

また、就職者に関する卒業後の就職状況を産業別、職業別に整理すると、資料5-1-Bに示すとおりである。本学部の卒業生の主な進学先・就職先を資料5-1-Cに示す。

資料5-1-A 卒業後の進路状況

	平成16年度			平成17年度			平成18年度			平成19年度		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
大学院	82	25	107	71	32	103	86	25	111	78	19	97
就職	36	26	62	41	33	74	45	39	84	50	40	90
その他	29	15	44	17	12	29	9	11	20	16	6	22
計	147	66	213	129	77	206	140	75	215	144	65	209

資料5-1-B 産業別・職業別就職状況(人)

		平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	
就職者数		62	74	84	90	
産業別	建設業	0	2	5	4	
	製造業	21	34	23	16	
	情報通信業	16	22	20	27	
	卸売・小売業	1	8	1	4	
	金融・保険業	1	1	1	2	
	教育、学習支援業	1	1	1		
	サービス業	19	5	30	33	
	公務員	2	0	0	1	
その他	1	1	4	3		
職業別	専門的・技術的 職業従事者	計	45	55	48	75
		技術者	44	55	48	75
		高等学校等の教員	1	0	0	0
	事務従事者		4	19	20	12
	販売従事者		3	0	0	2
	その他		10	0	16	1

資料5-1-C 主な進学先・就職先

(進学)	九州大学大学院、北陸先端科学技術大学院大学大学院、奈良先端科学技術大学院大学大学院、武蔵野美術大学大学院
(就職)	トッパンアイデアセンター西日本、博報堂フォトクリエイティブ、アルパイン、オンキヨー、キャノン、セガ、ティー・ヴィー・キュー九州放送、ゼネラルアサヒ、ソニー・エリクソン・モバイル、コミュニケーションズ、大日本印刷、ダイハツ工業、タマホーム、大塚家具、エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ、凸版印刷、トヨタ自動車九州、日本放送協会、乃

村工藝社、富士通テン、本田技研工業、三井ホーム、東陶機器、T O A、日東紡音響エンジニアリング、富士通九州エンジニアリング、清水建設、積水ハウス、九州博広
 (業種別人数：平成 18 年度) 技術職：21 名、デザイン・設計関連：20 名、情報関連：14 名、営業：13 名、放送関係：4 名、音響機器関連：3 名、総合職 4 名など

資料 5-1-C に示す進路状況については、卒業生の約 50% が大学院(修士)への進学
 の他、システムエンジニア、建築・機械・機器の技術職、営業のほか、広告、コンサル
 タント、設計、放送、音響機器、出版などデザインに関連する業種を有する国内有数の
 企業を中心に広範囲にわたって就職している。就職者の約 70% が技術職に就いて
 いるが、制作・製造現場と顧客のニーズとを繋げるコーディネータ的な技術職に就いて
 在学時に培った技術や知識を発揮している学生もあり、総合的な設計能力をもった高
 次のデザイナーを養成するという本学部の目的を十分に達成していることを示して
 いる。

観点 関係者からの評価

(観点に係る状況)

本学部の卒業生の就職先の関係者からの意見聴取は、「九州大学の卒業生の評価に
 関するアンケート」により行った。

平成 19 年度に九州大学の卒業生が就職した企業を対象に行った。この内、芸術工
 学部の卒業生が就職した企業の中から 15 社から回答があった。この結果を資料 5-2-
 A に示す。各項目とも 90% 以上が評価 3、評価 4 及び評価 5 と高い評価を受けて
 いる。

資料 5-2-A 就職先へのアンケート調査の結果

1 は極めて劣る、5 は大変優れている (5 段階評価)

	1	2	3	4	5
1. 専門分野の知識がしっかり身についている。	1	0	6	5	2
2. 幅広い教養・知識を身につけている。	1	0	7	5	2
3. 専門分野に関連する他領域の基礎知識が身についている。	0	1	7	5	2
4. 知識や情報を集めて自分の考えを導き出す能力がある。	0	2	4	8	1
5. チームを組んで特定の課題に適切に取り組む能力がある。	0	2	5	7	1
6. ディベート、プレゼンテーション能力がある。	1	2	5	5	2
7. 国際コミュニケーション能力、異文化理解能力がある。	1	1	11	1	1
8. 知識や情報を集めて自分の考えを導き出す能力仕事に対する使命感や責任感が強い。	0	2	2	8	3
9. 積極的でリーダーシップがとれる。	1	1	7	4	2
10. 実務能力がある。	0	2	3	9	1
11. 期待通りの活躍をしている。	0	2	3	6	3

本学部で養成したい主な能力であるデザイン能力、設計能力及び企画・立案能力につ
 いては、本学部の卒業生が就職している企業に対するアンケート調査結果(資料 5-2-
 A) から分かるように、知識や情報を集めて自分の考えを導き出す能力、プレゼン
 テーション能力、実務能力に関して、就職先から高い評価を得ている。また、企業
 の「期待とおり活躍をしている」について評価 3、評価 4、評価 5 が 90% と超えて
 いることから、本学部の教育の成果・効果があがっていると判断できる。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

過去4年間における学部卒業後の進路状況については、就職者数が増加し、就職や進学でもない「その他」が平成16年度から半減した。職業としては「技術者」が70%以上であるが、デザイン・情報処理・建築・機械・機器などの技術や知識をもとにした技術者に加えて、制作・製造現場と顧客のニーズとを繋げるコーディネータ的な技術職に就く学生もおり、このことは幅広く深い教養と総合的な判断力を備えた創造性豊かな人材を輩出しているということが言え、芸術工学の特性である総合性を、学部学生の学習過程を考慮して、具体性を通して身に付けさせているという点で教育の成果や効果があがっている。

また、就職先の関係者からのアンケート調査結果から、本学部で培ったプレゼンテーション能力や実務能力を活かして企業の期待どおりの活躍をしているとの評価が90%を超えていることから、本学部の教育の成果が・効果があがっていると判断できる。

Ⅲ 質の向上度の判断

①事例1「教育課程の改正」(分析項目Ⅰ・Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取組)

本学部では資料1-2-Aに示すように平成18年度に教育課程の大幅な改正を行った。これは大学院教育の質の充実を目指すために学部教育を凝縮し、知識・技術の修得を徹底強化することが目的である。あわせて講義と演習の組み合わせにより理論と実践の連携強化や、芸術工学部の全学科に共通の基礎知識や技術について教育する科目を設けるなど、創造性豊かな設計家・デザイナーを育成する教育課程を編成した。したがってこのことは本学部の教育の質の向上につながり、大きな改善点といえる。

②事例2「ユニークな教育方法」(分析項目Ⅲ)

(高い質を維持していると判断する事例)

設計家・デザイナーはその技術やセンス・創造性に加えて、コミュニケーション能力を求められる。このため本学部では演習科目の多くにプレゼンテーションを加え、自らの制作意図や役割・機能を的確に他者に伝達する訓練を行っている。特に近年、社会的にコミュニケーション能力の育成を大学に要請される傾向が強いが、この要望に対応する教育方法であるといえる。また、学外学習やフィールドワークを多く取り入れ、知識の受容だけでなく、実社会から新たなアイデアや課題を見いだす能力を涵養している。これらの教育方法の工夫の成果として、学生を交えた産学官連携事業やコンペでの受賞などに繋がっており、教育の質における大きな成果であるといえる。

③事例3「『口頭試験』による知識の活用能力の確認」(分析項目Ⅲ、Ⅳ)

(質の向上があったと判断する取組)

3年後期に実施する「口頭試験」では、学生がこれまでに学習してきた知識について、授業科目の枠を超えて創造的に活用する能力を備わっているか否かを組織的に確認・評価している。この試験の存在を入学時から示すことで、授業で学んだことをただ覚えるだけでなく、活用することにより課題解決へと導いていくことについて考えさせている。

④事例4「シラバスの学外公開及び教育目標の明示」(分析項目Ⅲ)

(質の向上があったと判断する取組)

シラバスは、授業の概要や授業計画だけではなく、教育目標及び成績評価基準を明示し、履修上の注意事項や学習相談、参考文献など詳細な内容で、かつ学生の発展的な学習を支援する内容に改善し、平成18年度から学外に公開している。GPA導入に合わせ、学生にシラバスの内容を理解して授業に臨むことを求めている。

これらの取り組みを通じて、学生に主体的な学習を促しており、教育の質の向上水準は高いといえる。